TURN JOURNAL

特集

ちぐはぐな時間

WINTER 2020

ISSUE 06

ポーチュガル

https://turn-project.com/

文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo Tokyo FESTIVAL

今号の趣旨

コロナ禍によって、様々な行事やイベントが中止・延期になった。あったはずの「時間」がなくなり、季節感が失われ、記憶が飛び、時間感覚もどうやら狂っている。このちぐはぐ感。その上、先々の予定を立てようにも、見通しが効かない。

自粛期間、緊急事態から平時への曖昧な移行、そして2度目の緊急事態宣言を経た現在も、コロナ禍は私たちに一律の行動を強いている。しかし感染に対する恐怖心、「不要不急」の判断はそれぞれ異なる。仕事を失った人。旅行に出かける人。感染防止と経済活動は両立不可能。何を優先すべきなのか誰にも分からない。

＊

私事で恐縮だが、数年前から月2回の勉強会に参加しており、放課後の夕食を兼ねた十人程のささやかな宴席の幹事をしている。開催場所の韓国料理店は、味もよく値段も手頃で、いつでも仕事帰りの労働者で賑わっていた。

落葉が寒風に舞い、日に日に感染者が増えるなか、共に学ぶ友人から「自粛してはどうか」と連絡を受けた。私は宴席の「時間」を大切にしていたから（余分な「時間」にこそ文化的な意味が宿る）、「席は分けている。自粛は自発的にすべきこと。自由意志について考えたい」と返した（今思えば乱暴すぎた）。彼女は自身が疾患を抱える以上に、医療従事者である家族を想い、切迫する医療崩壊を防ぐために社会に貢献したいと、勉強会が終わると私を避けて帰宅するようになった。

それからの毎日、ニュースを見るたび、私は自分が非社会的人間なのではないかと自責の念に駆られた。そしてついに店に宴席の取り止めを申し出た。

一ヵ月の時間が流れたある日、明るい気配りで店を繁盛させてきた女性の店員から電話があった。彼女は、「お客さんが来なくて、年内で店を閉めることになった」と、たどたどしい日本語で申し訳なさそうに語った。私は大切な「時間」のみならず、自由に語り合える友人も、心地よい店の雰囲気も、安心して宴を任せられる店員も失ったことを知った。

＊

「ちぐはぐな時間」の背景には、それまで時間を共有してきた人や場との分断がある。人はそれぞれの「タイムライン」を生きており、ずれた時間、異なる時間が重なり合うなかで、お互いを理解していたはずだ。コロナ禍で、その重なり合いが崩れ、溝が深まり、お互いの「生きる時間」が見えにくくなっている。その綻びは修復できるのだろうか。

国内で初めてコロナ感染者が確認されてから一年目にあたる節目の時期、私たちが経験した「ちぐはぐな時間」を契機に、それぞれの「日常の時間」「生きる時間」を見つめ直してみたい。

（永峰美佳）

TURN JOURNALとは？

障害の有無、世代、性、国籍、生まれ育った環境などの背景や習慣の、違いを超えた出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクト「TURN」。一人ひとりの異なる特性を掘り起こし、あらゆる意識や枠組みを更新していくことを目指しています。「TURN」の取り組みとそれらの意義を、様々な角度から伝えていく定期刊行物『TURN JOURNAL』は、これまで冊子という形で、年に1～2回発行してきました。2020年度は、日々変化してゆく「TURN」とそれらを取り巻く世界について、その時々の声や状況を伝えるメディアとして、装いも新たに、夏・秋号に続き、冬・春と定期的に発行していきます。

CONTENTS

日常の痕跡――私が感じた「ちぐはぐな時間」それぞれの「生きる時間」
石倉敏明［人類学者／芸術人類学・神話学］――3
宮田 篤［美術家］――3
田村尚子［写真家］――4
大崎清夏［詩人］――5
手塚マキ［経営者／「Smappa! Group」会長］――8
近藤博子［気まぐれ八百屋だんだん 店主］――9
五十嵐朋之［クラフト工房 La Mano メンバー］――10
百瀬 文［アーティスト］――10
山本千愛［アーティスト］――11
明日何が起こるかわからないという5歳の頃があった
日比野克彦［TURN監修者／アーティスト］――6
インタビュー 手話と時間――「ゆらぎ」の共有――
瀬戸口裕子［手話通訳者］――9

日常の痕跡――私が感じた「ちぐはぐな時間」それぞれの「生きる時間」

「ちぐはぐな時間」をテーマに、2020年の「日常の痕跡」を、アーティスト、専門性に基づく独自の視点を持つ方、障害と共に生きる方などに、それぞれの表現方法で寄稿いただきました。

夕焼けと虹の間に

石倉敏明［人類学者／芸術人類学・神話学］

何年かおきに、それまで縁遠かった国々に頻繁に出かけたり、日本列島に閉じこもったりしている。足元の島々にいても、アジアやアフリカやヨーロッパやアメリカにいてもあまり変わらない。

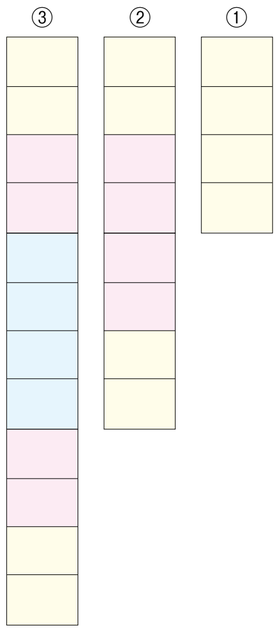
しかし、世界的なパンデミックが起きた今年の事情は、いささか特殊だった。オンライン上で明滅する奇妙な儀礼の数々。顔の見えない聴衆たち。国内でいくつか参加した展覧会の前後は、友人たちとも会えずにそそくさと移動した。休日もあまり人と会わずに、子供たちと一緒に近くの海辺へ魚釣りに出かけ、釣った魚を食べ、借りている田んぼで農作業をすることのほうが多かった。東京や大阪からの帰りには、接触を避けてしばらく自宅近くのホテルで待機する日々を過ごした。

祭りや墓参りのない、死者と出会うことのない夏をはじめて過ごした。素晴らしい蛇の絵を見た山形から秋田に戻る途中で、夕焼けを見た。時間は、少しもゆがんでいなかった。人間の活動が少し減衰した分、世界中の大気や水が透き通ったように感じた。人間の行いが、いかに時間というものを伸縮させているか。いくつかの雑誌と本と新聞とウェブに原稿を書いた。僕たちはいま動物であることを自粛し、植物になろうと欲しているのかもしれない。人間が動物性を自粛するとはどういうことだろう。人間はまだ、ガソリン車で、飛行機で、電車で移動しているというのに。

親しい友人たちとキャンプ場で焚き火を囲んだ。朝、娘を送り出したあと、大きな虹を見つけた。虹の足元に異性が立つとき、性が変わるというバルカン半島の神話。虹の足元には市を立てるという、日本の中世の記録を思い出した。虹の蛇に少女が飲み込まれるというオーストラリア・アーネムランドの神話を頭蓋骨の中で揺さぶった。なぜかずっと前に亡くなった祖母と、秋に亡くなったばかりの尊敬する同僚の顔を思い浮かべていた。二人とも、生まれたばかりの赤ん坊の顔のように尊く透き通っていた。車窓から見た夕焼けを思い出した。

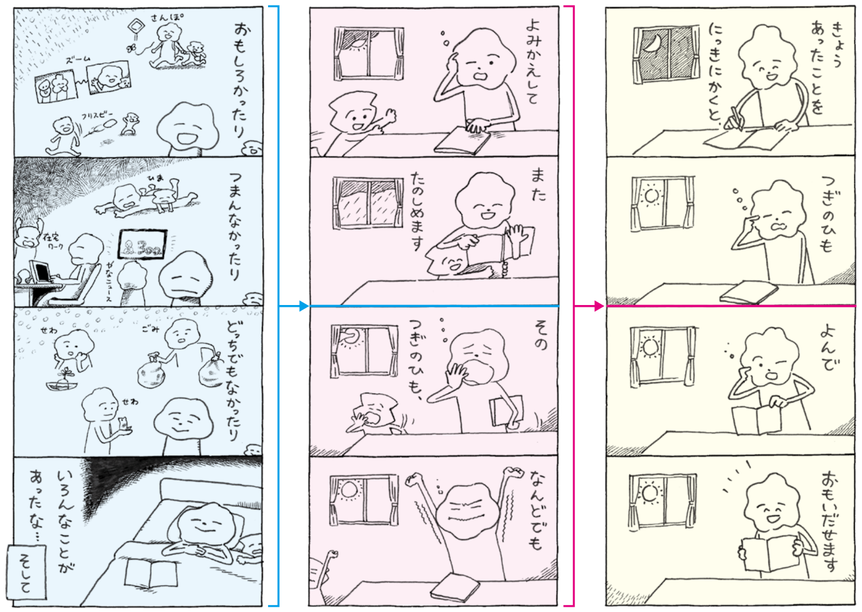
いしくら・としあき　秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授。国内外にて聖者や山岳信仰、「山の神」神話等を調査。環太平洋地域の比較神話学や非人間種のイメージをめぐる芸術人類学的研究を行う。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館「Cosmo-Egg宇宙の卵」に参加。共著に『Lexicon 現代人類学』（以文社、2018年）、『野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅』（淡交社、2015年）等。

計12コマがこのような流れでつながります



日記のまんが

宮田 篤［美術家］



みやた・あつし　他者とのかかわりのなかにある差異を見つめることを制作の契機にし、各地で継続的なプロジェクトを実施。TURN LANDに参加。

手紙を届ける

大崎清夏［詩人］

ローラというともだちがいる。ベルリンに住むブラジル人の女の子だ。共通の知人の紹介で出会い、ある日彼女は私がベルリンの小さな書店で開いた朗読会に来てくれて、「うるさい動物」という詩を気に入ってくれた。それからすこしずつ仲良くなった。私が日本に戻って何か月か経った頃、ブラジルに戻っていたローラから「文通のプロジェクトを思いついた」とメッセージが来た。私たち、うるさい動物たちとして、考えてることを話しあおうよというお誘いだった。ぜひ！と私は即答した。

切手を貼ってポストに投げこめば、東京でも、ベルリンでも、リオ・デ・ジャネイロでも、手紙は海を越えて空を飛んでちゃんと相手のポストに届く（たまに失踪することもあるけれど）。メールやSNSに慣れた私たちには、このすこし遅い自然な時間のかかりかたがおもしろかった。手紙は私たちの思考を、時間と空間ごと吸収して届けてくれるような気がした。

2通ずつやりとりした後、忙しさに負けて文通プロジェクトは途絶えた。届いた手紙の朗読を録音して、最終的にはベルリンのギャラリーで発表しようなんて計画は膨らんだけれど、ざんねんながらまだ実行に移せていない。

2020年春、久しぶりにローラ宛ての手紙を投函した日、家に帰るとローラからの手紙が届いていた。1月のベルリンの街が不気味なほど静かだったこと、恋人が最近すこし冷たいこと、ブラジルでリオのカーニバルに参加したけれどあまり楽しくなかったこと、がらがらの飛行機に乗ってベルリンに帰ったこと……。ローラの寂しさが、便せんからぽたぽた滴った。便せんに同封されていた小さな赤い花びらが机にぱらぱら落ちて、私の猫がそれをくんくん嗅いだ。その様子を動画に撮ってローラに送るとすぐに返事が来た。「あなたを感じる。大好き♡」手紙の時間にあんなにこだわっていたのに、一瞬で届く動画に簡単に救われてしまう私たちなのだった。

おおさき・さやか　早稲田大学第一文学部を卒業。2011年、ユリイカの新人としてデビューし、第一詩集『地面』（アナグマ社）を刊行。2014年、第二詩集『指差すことができない』（青土社）が第19回中原中也賞受賞。第三詩集『新しい住みか』（青土社、2018年）。ダンス、音楽、美術など、他ジャンルとの共働作品を多数手がける。2019年ロッテルダム国際詩祭招聘。女子美術大学講師。

うるさい動物

大崎清夏

言葉を信じるな
「青い大空」を信じるな
「輝く大地」を信じるな
「希望の光」を信じるな
わたしはうるさい動物である
わたしは絶えずおしゃべりしながら歩行する動物である
わたしの見た光景はわたしにしか語ることができないのではない
あなたの見た光景はあなたにしか語ることができないのではない
言葉は嘘つきで夢見がちだ
臆病で出たがりだ
理想ばかり立派で何にも出来ない
言葉は何の力も持っていない
言葉にできることは何にもない
だから、言葉を信じるな

うるさい動物には二億年前のパンゲアの分裂が見える
一万年前のビルマの洞窟に描かれた炎が見える
四〇〇年前の江戸じゅうの川の汚さが見える
六〇年前に二〇代だった杉山千代の不器用な恋愛が見える
クレーの天使が東京の空の雲間に見える
武蔵野の山あいにカフカの城が見える

言葉を信じるな
政治家の言葉を信じるな
デモ隊の言葉を信じるな
病人の言葉を信じるな
先生の言葉を信じるな
おんなの言葉を信じるな
武士の言葉を信じるな
セレブリティの言葉を信じるな
労働者の言葉を信じるな
セレブリティの言葉を信じるな
わたしの言葉を信じるな

世界中のだれもが被災している
世界中のだれもが罹患している
世界中のだれもが発症している
世界中のだれもが感染している
言葉を信じるな

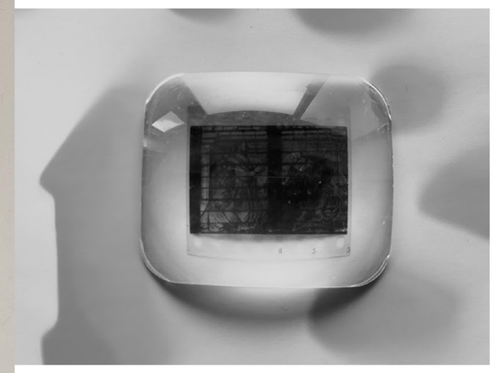
うるさい動物が都市に分布する
家賃がかかる
食費がかかる
光熱費がかかる
音楽が要る
思想が要る
言葉が要る
ひとつ欠ければ体調を崩す
熱が出る

けれど、薬を信じるな
巫女を信じるな
歌手を信じるな
資本主義を信じるな
キリスト教を信じるな
世界市民を信じるな
愛と勇気を信じるな
耳を、ふさぐな

わたしはうるさい動物である
ふるさとのなまりなくせし動物である
モカコーヒーは、かくまで苦し！
わたしはうるさい動物である
死ぬまでうるさい動物である

「うるさい動物」第二詩集『指差すことができない』（2014年、青土社）より転載。初出『現代詩手帖』2011年6月号

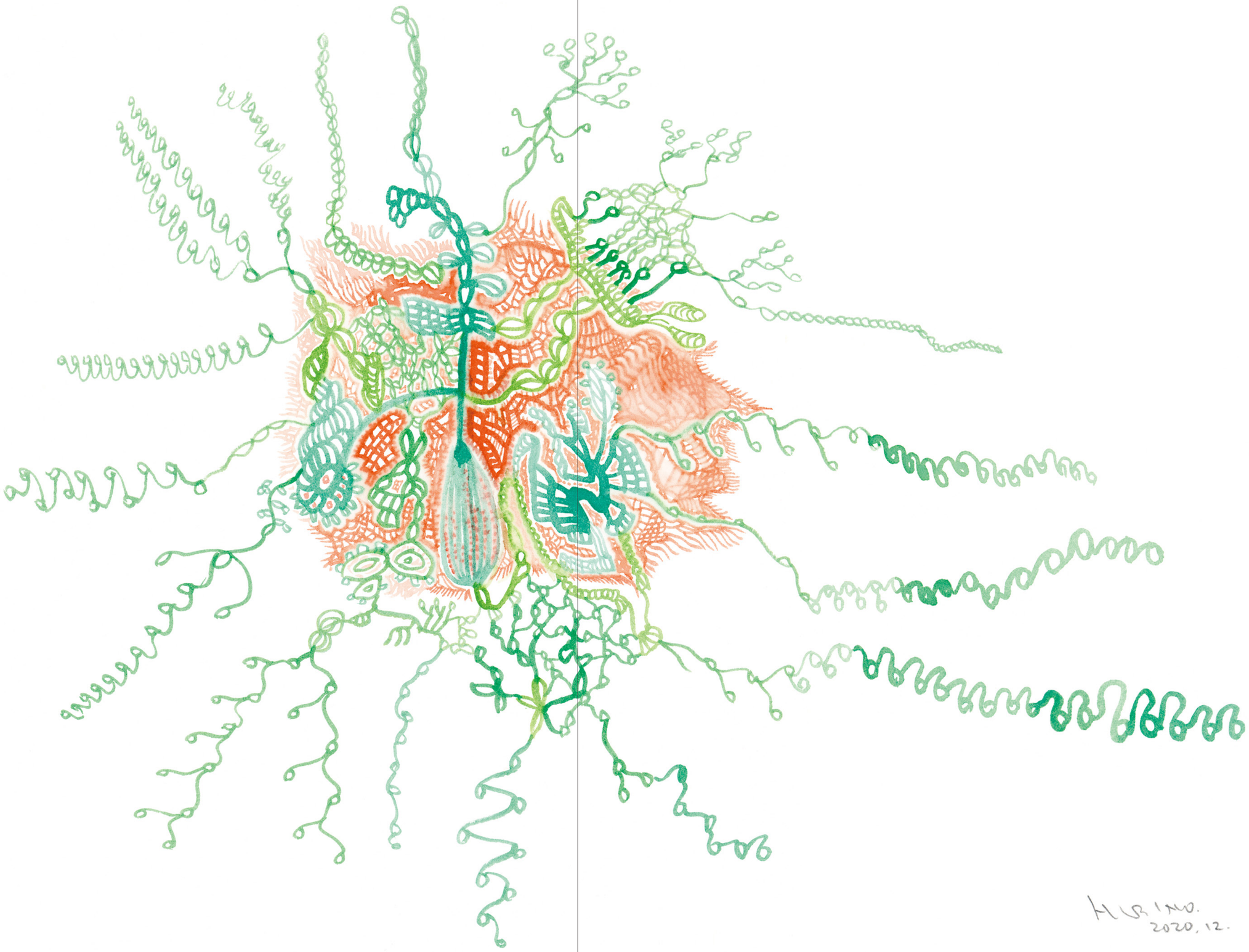
たむら・なおこ　写真家。「見る」のではなく「目で触れる」ように（皮膚感覚をもった）写真や映像表現を行っている。「ヴェッター公園」主宰。著書に『Thaumata／タウマタ』（T.I.G Photography Paris and T.I.G、2015年）、『シリーズ ケアをひらく ソローニュの森』（医学書院、2012年）等。近年の展覧会に「記憶の貯蔵室」（富岡製糸場西繭置場、2020年～継続中）、「ヒロシマ・アート・ドキュメント2019」（旧日本銀行広島支店、2019年）等。TURNフェス4に参加。



© naoko tamura

The reinvention of the domestic life ——再燃の、日常生活

田村尚子［写真家］



日比野克彦《明日何が起こるかわからないという５歳の頃があった》2020年

明日何が起こるかわからないという5歳の頃があった

日比野克彦［TURN監修者／アーティスト］

明日何が起こるかわからないという5歳の頃があった。学校に通い始めると、時間割というものが現れて1週間のルーティンが始まり、明日は自分が何をしているのかが分かるようになった。

でもそれ以外の決まりのない、何をしているかわからない時間が基本になっていた時代が、10歳くらいまであったような気がする。

そのバランスが徐々に変化していき、予定を立てることが明日以降の正しい時間の使い方になっていった。

しかし2020年は、予定を立ててもそうはならないかもね、という予定を立てることが多くなった。時間は止まらないけれども、予定はなくなる。空振りである。というより、バットは振っていてもボールがこない、素振りである。

ボールを打つという今までのルールでは、ゲームが始まらない。ならば、素振りのゲームを考えよう。これは退化ではない、進化である。一人でできるし、ボールをなくすこともない、打ったボールが窓ガラスを割ることもない。

ボールが時間だとする。ボールが目の前にくる、それを打つ、すると手応えを感じる。つまり時間との共同作業、これが予定のある時代の時間の実感の仕方であった。

素振りの時は、時間をどこに感じればいいのだろうか、それは、野球というルールのあるスポーツではなく、バットというボールを打つ道具でもなく、ただ単に棒を振るという本能的な喜びがあったから、野球も生まれたという、根源的な領域に意識をもっていくということ。

これは逆戻りの時間ではない。一回りして成長したからこそ辿り着ける、素振りの時間である。

寝る前に自分に呟く。

「明日何が起こるかわからないから、明日予定調和ではないことを起こす。」

2020年12月13日

びびの・かつひこ　東京藝術大学美術学部長、美術学部先端芸術表現科教授。アートを社会の中で機能させる手法を試み、地域や多業種の人々との共同プロジェクトを展開。2015年より「TURN」の監修を務める。

p6–7に作品掲載

理解不能な日々に生きる

手塚マキ［経営者／Smappa! Group］会長

人は理不尽なこと、理解不能なことに畏怖を感じるという。コロナは正に理解不能。そのもとで私達はどう行動すればいいのか？ を指し示す指導者達も理解不能。

私は子供の頃から理解不能が耐えられない。

先生に休み時間に「何で？ 何で？」と詰め寄り続けた幼少期。大人になっても変わらない。それは理解不能に対する恐怖心が人一倍強いからかもしれない。

子供の頃は宇宙が恐くてしょうがなかった。夢に宇宙が出てきて泣いて起きたことが何度もあった。洋画も観られなかった。理解できない言語と風景は頭に入らない。大人になって海外旅行を沢山して、アメリカとヨーロッパの違いがわかってから、洋画は観られるようになった。ウルトラマンにも興味が湧かなかった。

感染症禍に生きる人間に、私達は突然なった。

私は急いで本を買い漁った。感染症禍での生き方を学ばなければいけない。幾度も起きた感染症禍で人はどう生き延びたのか？ そこに今を生きるヒントが必ずある筈だ。

そして、歴史から人は何も学ばないんだなと痛感する。今も昔も変わらず社会の分断が起きていた。過去から学び、私は気持ちが落ち着いた。社会全体がいったん休憩するタイミングだと思った。

しかし、うちの会社は5月25日に緊急事態宣言が解除されてから営業を再開した。私は家にいた。

6月のある日、数か月前から約束していた、断りづらいビルオーナーや飲食店経営者との会食があった。私にとっては数か月ぶりの外食だった。恐る恐る指定された港区の高級料理屋に行くと、店は大盛況でコロナのコの字も感じさせない雰囲気だった。

怯えながら「久々に外食します」と話したら「え？ 飲食店経営者で会食しないで何しているの？？ それ以外にやることある？ それが仕事じゃん」と不思議がられた。彼らは毎晩今までと変わらない生活をしていた。「経済回さなきゃ」と気負っていた。

先日『ミシュランガイド東京2020』の発表があり、選ばれた店に食べに行った。「調査員はどうやって調査したんですか？」と聞いたら「2月と4月と5月に来ました」と言っていた。

私は家にいた。しかし私の店は営業していた。

何が一理解不能なことには耐えられない」だ。理解不能なちぐはぐな状況を見て見ぬフリをして甘い汁を啜って生きているのは自分じゃないか。

ちぐはぐで理解不能なのは私だ。

しかし、開き直って言うわけではないが、生きるってそういうことなんじゃないだろうか。

ちぐはぐじゃない人生なんてあるのだろうか。内田樹さんの本『寝ながら学べる構造主義』（文春新書、2002年）によると『こぶとり爺さん』という童話がある。ほっぺたのこぶに悩む二人のお爺さんがいて、そのうちの一人は鬼にこぶを取って貰えて、もう一人が羨んで出かけて行ったら、今度はこぶを二つにされた、という不条理な話だ。

この物語の教訓は「不条理な事実そのものをまるごと承認せよ」ということだそうだ。そういう不条理の説話があらゆる地域で長年語り継がれているらしい。

ちぐはぐな社会は今に始まったことではない。資本主義とはそういうものだ。コロナによって、ちぐはぐな社会がわかりやすく露呈しただけだ。

希望はある。スラヴォイ・ジジェクの『パンデミック』（Pヴァイン、2020年）の第一章の小題は「我々はみみな、同じ舟に乗っている」。今はちぐはぐでばらばらな社会が、一致団結できる時でもあるのだ。

歴史を振り返れば人間は成長しない。コレラの時もペストの時も、今も人は変わらない。では我々はどう生きていけばいいのだろうか。さあ。私にはわからない。ただ今を見つめて生きて行きたい。せめて何事もなかったようにさえ進まなければ、私はいいと思っている。

つか・まき　歌舞伎町でホストクラブ、バー、飲食店、美容室など十数軒を構える『Smappa! Group』会長。歌舞伎町商店街振興組合常任理事。1997年から歌舞伎町で働きはじめ、ナンバーワンホストを経て独立。著書に『新宿・歌舞伎町 人はなぜ〈夜の街〉を求めるのか』（幻冬舎新書、2020年）、『裏・読書』（ディスカヴァー・トウエンティワン、2019年）、共著に『ホスト万葉集』（講談社、2020年）等。

手話と時間 ―「ゆらぎ」の共有―

インタビュー　瀬戸口裕子［手話通訳者］　聞き手＝畑まりあ

2020年9月に開かれた「第11回TURNミーティング」では、手話通訳の聴者が、耳の聴こえない手話通訳のろう者に手話で内容を伝え、それを受けたろう者が公衆に向けて手話で発信するという、ろう者と聴者の連携による通訳を行った。手話通訳は、場や相手の状況によって配慮や工夫が加えられるもので、ろう者の手話には、豊かな表情や表現が含まれるという。そこで見えてきた「ゆらぎ」の共有とは？　今回、ろう者に手話で内容を伝えた瀬戸口裕子さんに話を聞いた。

手話と音声による会話の違いとは？

――瀬戸口さんはこれまで様々な現場で、手話の多様性や柔軟性を体感してこられたと思います。まず、手話による会話と、音声による会話の違いについてお話しいただけますか。

「メディア」が違うといいますか、もともとの言語体系が異なります。ろう者は主に目で情報を集め、聴者は耳で集めると思います。手話は、「目で見た会話」がより豊かだと感じます。たとえば「この前、○○を見た」という話題が多く、みなさん視覚的に物事をよく記憶しています。時々「瀬戸口さん、○○の看板（表示）見た？」と聞かれたりするのですが、私は全然見ていなかったりする（笑）。手話は視覚的なインプットとアウトプットが日常の会話のベースにあると感じます。

――手話通訳者は「見る」と「聞く」、二つのメディアをどう統合するのでしょうか。

チャンネルを変える感じです。「音」として入ってくるものを、頭のなかで映像化する。それを形や動きとして伝えていくことだと思っています。たとえば、音声で「今日は寒いなか、校庭を一生懸命に走りました」と聞いたら、その映像をまず頭のなかで思い浮かべて、その状況になりきって手話で表現します。

手話には、「同時性」という特徴もあります。「携帯を見ながら、コーヒーを飲む」というように、同時に二つのことを行っている場合、音声で表すときは、「携帯を見る」と「コーヒーを飲む」ことを一緒に伝えることはできませんが、手話だと二つの動作を同時に表すことができるのです。

――反対に、手話で伝えるときに時間がかかることはありますか。

抽象的なことや、具体性が欠けていてイメージがしづらい内容は、伝えるのに時間がかかってしまうことがあります。また日本語独特の、同音異義語による語呂合わせなどが話題に出てくると、補足説明が必要になり、時間がかかる場合があります。

ですが、逆もしかりで、手話を日本語で伝えるのに時間がかかってしまうこともあります。表現された手話の意味はつかめても、それを日本語でどう言い表せば良いのか、難しいことがあります。やはり手話と日本語、それぞれの言語が持つ概念が違うのだと感じたりします。

細かい観察力、豊かな表現力、深い感受性

――先日の「第11回TURNミーティング」のときのように、手話通訳のろう者に情報を伝える際に、心がけていることはありますか。

アイコンタクトを大切にしています。そして情報を固まりで伝えるように心がけています。細切れにしてしまうと意味を見失いやすいので、流れのなかで、意味を固まりとして伝えていきます。イメージとしては、荷物を一個ずつ手渡すのではなく、コンテナ車で輸送するみたいに、言葉のブロックを送り続けます。また手話通訳のろう者と聴者の信頼関係、技術と訓練、そのための環境が何より必要だと思います。

――手話通訳のろう者に伝わった情報が公衆に向けて発信されたとき、何が起きているのでしょう。

ろう者により伝わりやすい表現に変換されます。また、言葉が映像のように変わり、「イメージが広がる」ように変換されていきます。ろう者の表情は、質感も表現できるんです。ボール一つにしても、表情で「硬い」とか、頬を膨らませたりへこませたり動きを加えることにより、空気がパンパンとか、ぺこぺことかボールの状態などを瞬時に表すことができる。たとえば、「波が打ち寄せていました」という言葉についても、ろう者が表現する波って、繊細な波の動きやダイナミックな波まで、まるで波と同化しているかのような表現が目の前で起こる感じなんです。←

こんどう・ひろこ　東京都大田区に有機野菜や自然食品を扱う「気まぐれ八百屋だんだん」を営み、全国に先駆けて「こども食堂」をはじめる。TURN LANDを実施、TURNフェス5に参加。

「大人が幸せでいてくれないと……」

近藤博子［気まぐれ八百屋だんだん店主］

「気まぐれ八百屋だんだん」で毎週木曜日に開催していた「こども食堂」も、新型コロナウイルス感染症拡大のため、2月の第三週と四週の2回をお休みにして、様子を見る事にしました。

ところが、学校が突然の長期休校になり、保護者の方々からの悲鳴が聞こえてきました。

「ならば、何とかせにゃいかん」と、「こども食堂」のスタッフ会議を開き、3月9日から、平日のランチ弁当の予約を開始しました。4月の急激な感染症拡大の間、少しお休みをしましたが、給食が始まるまでは、ランチ対応を続けました。

作り手の心も弾み、子供達も楽しんで食べてもらえるように「どんぶり弁当」にした事が功を奏し、毎日が楽しい時間になりました。外で遊んだり、出かけたりしてはいけないと行動の制限を受けている子供達が、唯一堂々と出かけられる「お弁当の受け取り」。

コロナ不安の中でも、受け取りに来てくれた子供達とスタッフのつかの間の会話で、少しずつ笑顔が戻ってくる。就学援助家庭、ひとり親家庭、生活保護家庭とのつながりも増え、不定期ではあるけれど食材のおすそ分けも行っています。

そして何よりも子供達の事を気にかけてくださる大人が、少しずつ増えています。

コロナ禍で、人は知らず知らずのうちに、「人への想いをめぐらす事」を、再構築しつつあるのではないかと思っています。まだまだ不安定な毎日ですが、子供達も大人達も、身近な人への「想い」を忘れずに今を生きていける様、祈るばかりです。

一人一人は、小さな事しかできません。でも、小さな事ができる人がたくさんいれば、点が線になり面となって、大きな力になるのではないでしょうか。

「大人が幸せでいてくれないと、子供は幸せになれません」という子供達の言葉にドキッとし、健気に生きる姿に勇気をもらい笑顔でいられます。

「ありがとう!!」

——同じものを見ても、機微や表情、質感を含む情報量が違う。ビジュアル的に豊かですね。

私たち聴者は見ているようで、見ていないのかもしれません。ろう者と一緒に美術館に行くと、「そこまでちゃんと見ていたんだ」と、見る視点の細やかさに気づかされます。肖像画を見ても、着物の模様まで話してくれて、その質感をすぐに再現してくれます。聴者ですと「きれいな格子模様だね」で終わってしまうところですが、そのきれいさ、ディテールを再現できる。その力は本当に素晴らしいと思います。

——その再現性は時間を超え、そこに再び感じる時間が生まれ、より深い体験につながりそうです。

「この前ね、○○へ行ってね、○○を食べてね」という話を聞くと、自分もタイムマシンでその場に行ったかのように、体験がリアルに伝わってきます。聴者と話していても、そこまでイメージが膨らむことは少ないように思います。

生きている時間の「質」が全然違うといいますか、彼らの話を聞いていると、追体験する感覚になり、映画の話でも、主人公から脇役まで、いろんな人に成り代わって説明してくれます。実際に映画を一本見たような気持ちになるし、もとの映画より面白いと感じるぐらいです。

2020年9月19日「出会い方とコミュニケーションのいろいろ～様々な手法やツールを通して考える～」をテーマに開催された「第11回 TURNミーティング」にて、手話通訳のろう者と、ゲストをつなぐ瀬戸口（中央）撮影＝鈴木竜一朗

第11回に引き続き、2020年11月29日「『ろう文化』ってなんだろう～『手』で会話する？～」をテーマに開催された「第12回 TURNミーティング」にて。手話通訳のろう者に情報を伝える。　撮影＝金川晋吾

時間の「質」と「質感」、「ゆらぎ」

——先日の「TURNミーティング」の現場は、背景も言語も異なる人たちによる出会いと発見に満ちた時間のように感じました。

それは「ゆらぎ」の共有だったのではないかと思います。時間には「量」と「質」という二つの側面があります。「今日の打ち合わせは何時から何時まで」といった時間の長さを「量」として共有してきたこれまでの日常に対して、コロナ禍以降、その「量」的な時間が急にあやふやになり、一人ひとりが日常をどう過ごすかが大切になり、時間の「質」というものが浮き彫りになった気がします。

その時間の「質」を、手話通訳に重ねてみると、時間には一人ひとり特有の「ゆらぎ」があるんですよね。たとえば、「TURNミーティング」のゲストとして参加された、盲ろう者の森敦史さんへの手話通訳では、情報が伝わっているかどうか様子を見ながら、待つ時間が必要なときがあります。また言葉を伝えるにも、一方的に絶え間なく話すのではなく、言葉と時間のバランス、どこで区切り、どう伝えるのが一番良いかを考えています。そして、森敦史さんは触手話（しょくしゅわ）という手指の触覚を通して、様々な感覚をつなげ、話し手の「ゆらぎ」や「質感」を感じ取ろうとしているような気がします。

今回の「TURNミーティング」は、一人ひとり、時間の「ゆらぎ」が異なる人たちが一堂に集まって、そこでお互いの「質感」を探りながらコミュニケーションを取っていたと思います。そういう経験はなかなか普段なくて、その意味でとても豊かな時間が流れていたと思います。

——その「ゆらぎ」は、障害の有無にかかわらず、誰もが必要としているものなのでしょうか。

コロナ禍で人と会うことができなくなり、オンラインだと「ゆらぎ」が削ぎ落とされていく。話しているときに身体が揺れるとか、ため息をつくとか、そういう瞬間が見えにくい。手話通訳者としては、単に言葉を翻訳するだけではなく、話しているときの「ゆらぎ」や空気感みたいなものを自分のなかに取り入れて、その雰囲気をできるだけ翻訳して伝えることを心がけています。無意識の動作に現れる「ゆらぎ」を感じ取って交わされるのが理想のコミュニケーションだと思います。

——「ゆらぎ」の多様性をお互いに感じ取り、認め合えると良いですね。

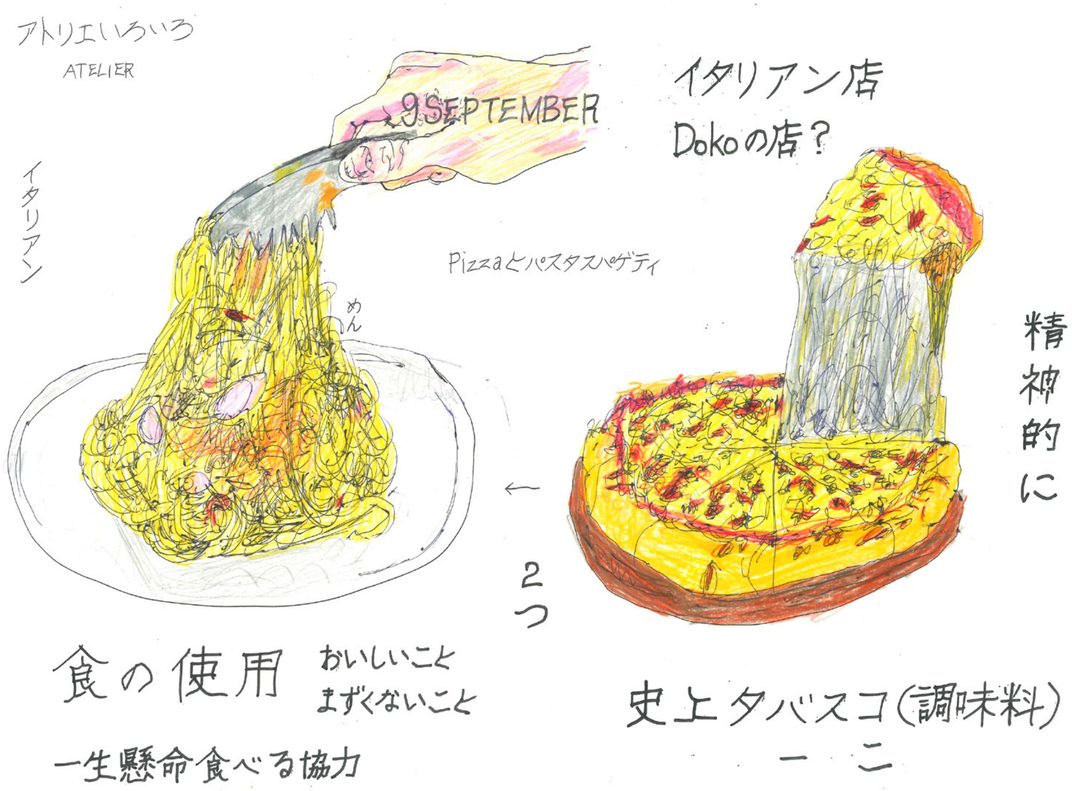
ろう者と聴者が生きている世界には、それぞれの集団のなかに不文律（ふぶんりつ）があると思っています。またそれと同時に、人は個々の「ゆらぎ」を備えている。「ゆらぎ」とは規則性と不規則性の間に存在するもので、同じ時間を過ごしていても、それぞれの時間の感じ方が違うパラレルワールドなのかもしれません。

お互いの「ゆらぎ」を享受したり、分かち合ったりするのはとても面白くて興味深いと思います。どちらかがどちらかを押し潰さないよう、どちらかに偏らないよう、手話通訳者としてそれぞれの時間をつないでいきたいです。

せとぐち・ゆうこ　手話通訳士、アート・コミュニケータ。「A-net」会員。生活に密着した手話通訳から、美術館やアートプロジェクトの手話通訳までを担う。近年、新たな取り組みとして演劇の舞台手話通訳を行う。2020年度のTURNミーティングでは、アクセシビリティに係るコーディネートに携わる。

アトリエ いろいろ ——「料理」

五十嵐朋之［クラフト工房 La Mano メンバー］



「クラフト工房 La Mano（ラ・まの）」では、2020年4月から6月にかけての約2カ月間、就労メンバー全員の仕事を在宅ワークに切り替え、染め織りやアトリエ活動など、普段施設で行っている仕事に自宅で取り組んでいました。今回紹介する作品は、在宅ワーク期間に自宅で描かれました。

虫や魚、寺社仏閣など、毎年テーマを決めて、緻密な絵の上にいくつかの言葉を構成する五十嵐朋之さんの作風。今年のテーマは「料理」です。

いつもどおりに淡々とみなさん作品をつくり続けていますが、ちょっと緊張した日常の雰囲気や、在宅ワークの異なる感覚、居心地の良い日常の空気感など、その時々の時間が思わぬ形で作品に反映されているようです。在宅ワーク期間が終わり「La Mano」に久しぶりにやってきたメンバーは驚くほど変わりない様子で、当たり前の日常はあっという間に戻ってきました。

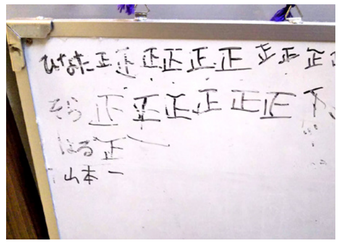
（高野賢二［クラフト工房 La Mano 施設長］）

くらふとこうぼうらまの　東京都町田市にある、障害のある人とない人が共に手仕事に励む就労継続支援B型事業所。TURN交流プログラム、TURNフェス1～5に参加、TURN LANDを実施。

郷に入ってはごろんと横たわれるか

山本千愛［アーティスト］

山口県に住民票を移したときにテプラでつくった表札。雨の日の翌朝には剥がれてしまう



池田家はお手伝いを正の字で記し、換金できる制度がある。そこに初めて一を加えてもらった

『TURN JOURNAL SUMMER 2020 ——ISSUE 04』で少し触れたが、私は、2020年の5月より山口県民になった。簡単に説明すると、同年の3月に愛知県から福岡県に向かって12フィートの木材を持ちながら徒歩で引っ越しをしていたところ、コロナの影響を受け、福岡県で住む当てがなくなってしまった。目的地と帰り道を失った私は、その時滞在していた山口県に住む、という全く想定していなかった選択をする。

私は池田さんという、山口県で唯一の知り合いの家に居候をさせてもらうことになった。

池田家からすると、ドアを開けると長い木材を持った人物が立っていて、「コロナで住む家がなくなりました」と言う。さらにその人物はアーティストを名乗るのである。

池田家は希有なことに、アーティストを支援することは当然だと思っている。ありがたい。しかし、そんな恩恵を受けることのできるアーティストって何なのだろう……。人の家で約2ヶ月ほど自粛という名の実質ニートのような生活を送る。自分が存在にばつの悪さを感じてならない。

それでもアーティストでいようとする自分が不思議で、夏に東京都に赴き、港区を木材を持って130kmほど歩くことにした。今まで意識的に東京を避けていた節がある。コロナで劇変した2020年の夏ならば、私は東京を歩けるのではないかという期待があった。

炎天下で意識朦朧（もうろう）としながら、いつの間にか、生きるために表現せねばならないという切実さが自分の足を進めていることに気がついた。

木材を持って歩くことそのものが、エラーを誘発する装置なのだと思った。そしてアーティスト自体もエラーを誘発するための存在なのではないかと思う。そのエラーは思考を停止させてくれない。

港区で声をかけられ、一緒に歩いたおじいさんは、故郷が山口だと言う。そして別れ際、彼は私に「死ぬなよ。」と言った。その言葉は炎天下に対してなのかコロナを危惧してか、私の心情を察してか、やけに私の耳の中でこだましていた。

やまもと・ちあき　自身のプロジェクト「12フィートの木材を持ってあるく」を2016年より実施。日本全国を木材を持って歩き、その過程をアーカイブし、作品を制作している。TURNフェス6に参加を予定していた。

歌うことが許された場所で

百瀬 文［アーティスト］

日本音楽著作権協会（出）許諾第2100587-101号

「マスクエフェクト」という、見慣れぬ文字がタッチパネルに表示されていた。どうやらそれを設定するとマイクの音圧が自動的に大きくなり、マスク越しでも声がこもらず聴こえるらしい。友人は、すごい世界になっちゃったねーと言いながら笑い、一曲目に松たか子バージョンの「Let it Go」（レット・イット・ゴー）を入れた。

電車の中でお喋りをする人が、前よりだいぶ少なくなったなという気がする。もともと日本人は無言だから不気味だとはよく言われていたことだったと思うが、ここ最近のそれはマナーというより「声を口から発することそのものの罪」みたいな不文律（ふぶんりつ）になっていて、わたし自身も多分にもれずそれを内面化していた。その結果何が起こったかというと、声帯の筋肉が衰え、カラオケがとても下手くそになっていたのである。

歌うのは好きだった。というよりわたしは、いろいろな曲を歌うたびにそれぞれの歌い手の声が自分の喉を通過していくような感覚が好きだった。桑田佳祐（けいすけ）なら桑田佳祐の、宇多田ヒカルなら宇多田ヒカルの、舌の固有の癖というものがあって、それが歌詞にのって口から出てくる瞬間、自分の舌はなぜか自動的にそれをなぞろうとするのだった。そこには他者の身体の上に自分の身体が重なる快楽があった。しかしそれも結局、声を張り上げるための筋力だったり、飛沫を飛ばすことが許される時間だったり、それらが継続的に保たれた世界があって初めて味わえることなのだとわかった。

マスクエフェクトはやはり呼吸が難しいということで、友人は荒い息を吐きながらマスクを外した。金属のマイクの前で大きく開かれたむきだしの唇を見ていると、なぜか性的な気持ちにも似た動揺を感じた。マイクの頭に被せられた白いガーゼのカバーは、どこか間抜けなコンドームのようにも見える。わたしは、互いの体液を許しあう時間が欲しかっただけなのかもしれない、と思いながら、そそくさとドリンクバーへと向かった。

ももせ・あや　武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程修了。パフォーマンスを記録する方法として映像を用いはじめ、身体と声、映像と声の関係を問う映像作品を発表。近年の主な個展「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」（EFAG EastFactoryArtGallery、2017-9年）等。

社会の動向

ここでは2020年9月から12月中旬にかけての、新型コロナウイルスをめぐる主な出来事を時系列で振り返る。

▼9月1日、新型コロナウイルスの影響による解雇や雇い止めが、8月末に見込みも含め累計5万人を超えたことが明らかとなる（厚生労働省調べ）。4日、世界保健機関（WHO）が新型コロナウイルスのワクチンについて、各国で供給がはじまるのは来年中頃との見通しを発表。10日、東京都の警戒レベルが4段階中で最も深刻な「感染が拡大していると思われる」から、一つ下の「感染の再拡大に警戒が必要」に2カ月ぶりに引き下げ。年末のNHK紅白歌合戦、史上初の無観客開催が発表。15日で、東京23区内の酒類を提供する飲食店などへの午後10時までの営業時間短縮要請が解除。19日、イベントの開催制限が条件つきで緩和。クラシック音楽コンサートや演劇など、大声を発しない屋内イベントの収容率が100%まで可能に。23日、ニューヨークのメトロポリタン・オペラが、2020年～21年シーズンの全公演中止を発表。

▼10月1日、観光振興策「GoToトラベル」キャンペーンの対象に東京が追加。飲食店や農林漁業者の支援策「GoToイート」キャンペーン開始。全世界を対象に入国制限措置が緩和され、ビジネス関係者や留学生など中長期の在留資格を持つ外国人の新規入国が可能に。23日、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会が年末年始の休暇の分散化を提言。24日、都民の都内旅行を補助する都の観光支援策、いわゆる「都民割」開始。25日、国内クルーズ船の運行が8カ月ぶりに再開。28日、新型コロナウイルス対策を助言する厚生労働省の専門家組織が、全国の感染状況について「10月以降、微増傾向が続いている」と見解。29日、国内の新型コロナウイルス感染者が累計10万人超え（クルーズ船含む）。

▼11月1日、海外の短期出張から帰国した日本人などについて、書類提出などを条件に帰国後2週間の待機が免除に。5日、国内の一日の新規感染者数が8月以来はじめて1000人超え。今年の「新語・流行語大賞」の30候補が発表。「3密（三つの密）」「ソーシャルディスタンス」「新しい生活様式／ニューノーマル」など半数以上が新型コロナウイルス関連。10日、北海道をはじめ各地の感染者数増加を受け、新型コロナウイルス感染症対策分科会が「適切な対策を取らなければ急速な感染拡大に至る可能性が高い」とする緊急提言を発表。「第3波」の到来が話題に上るように。18日、国内の一日の新規感染者数が初の2000人超え。東京でも8月1日の472人を超え過去最多の493人となった。19日、警戒レベルが最も深刻な「感染が拡大していると思われる」に引き上げ。24日、「GoToトラベル」の対象から札幌・大阪両市が一時除外されることが決定。27日、宮内庁が2021年1月の「新年一般参賀」中止を発表。昭和天皇の逝去以来初。28日、都は酒類を提供する飲食店などに対し、営業時間の短縮を要請。感染急拡大地域で医療従事者が不足するなど、「医療崩壊」が報道されるように。

▼12月4日、政府はひとり親世帯への臨時特別給付金を追加で支給する方針を固める。8日、新型コロナウイルスのワクチン接種が英国で開始。日本に供給予定のワクチンでは初。12日、国内の一日の新規感染者数が初の3000人超え。14日、その年の世相を表す漢字一文字を一般募集する「今年の漢字」に「密」が決定。政府が「GoToトラベル」について、12月28日から来年1月11日まで全国一斉に停止すると発表。18日、新型コロナウイルスの影響で大学・大学院を休退学した学生が10月までに少なくとも計5238人いることが文部科学省の調査で明らかに（全体としては、昨年の同時期より退学6833人、休学6865人減少）。

（杉原環樹）

編集後記

フランスで2000人超が集まり新年を祝う「闇パーティー」が開かれ、取り締まりの警察に抵抗したというニュースが流れた。けっして肯定できる行動ではないが、日常が暗いからこそ、「明るさ」を求めたが故なのかもしれない。コロナ禍以前には違法でも何でもなかった、その求めた「明るさ」とは何だったのか。人にとっての根源的な欲求、それを満たし、バランスをとってきたこれまでの日常が遠く感じられる。いつの時代でも、「闇」とそうでないものは、時々の社会情勢に応じて、いとも簡単に反転するものなのだと身に染みた2020年となった。

朝、テレビをつけると、感染者数の報道。同じ話題が続く。その変わらぬ様のまま、1週間、1カ月、そして1年が経とうとしている。カレンダーの数字は着々と進んでいく一方で、過去と現在の境が曖昧になっていく。感染者の数字が、数字でしか捉えられなくなってしまう先々のことを不安に思った。自殺者も2020年7月以降、5カ月連続で前年比増。この数字が意味するものとは何だろう。私たちはどのような数字に、どのような重みを感じればよいのだろうか。

移動の時間、日記や手紙の時間、飲食の時間、手話の時間、カラオケの時間、棒を引きずる時間。本号に登場する様々なシーンでは、それらから想起された身体感覚から記憶まで、数字と数字の間に人それぞれの固有の時間が存在することを感じた。

「闇」という漢字には「音」の字形が含まれる。その字義を調べてみた。「門を閉じて光が入らない状態」「視覚が効かない状態」という説から、さらに「光がなくても音がある状態」という解釈が導き出されていた。「闇」のなかにどんな音があり、時間があるのか、想像力を働かせたい。

（畑まりあ）

TURNの活動とは？

「TURN（ターン）交流プログラム」……アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、アーティストによる、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたリサーチも行う。

「TURN（ターン） LAND（ランド）」……福祉施設や団体が、アーティストとともに参加型のプログラムを企画する。それぞれの場所に備わった従来の機能に、地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、市民と共に日常的に「TURN」を実践する場をつくる。

「TURN（ターン）フェス」……「TURN交流プログラム」や「TURN LAND」を実施する、多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなど様々なコンテンツを通じて「TURN」を体感できる。

「TURN（ターン）ミーティング」……「TURN」の可能性を共有し、語り、考え合う場。参加アーティストや交流先などの関係者と共に、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、様々な視点から「TURN」を考察する。

『TURN JOURNAL』のバックナンバーは、
こちらからご覧いただけます

TURN JOURNAL 2018

TURN JOURNAL SUMMER 2019 —ISSUE 02

TURN JOURNAL SPRING 2020 —ISSUE 03

TURN JOURNAL SUMMER 2020 —ISSUE 04

TURN JOURNAL AUTUMN 2020 —ISSUE 05

主催＝東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京／特定非営利活動法人Art's Embrace／国立大学法人東京芸術大学
監修＝日比野克彦［アーティスト／東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授］
プロジェクトディレクター＝森司［アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長］

TURN JOURNAL WINTER 2020 —ISSUE 06
2021年1月31日発行

監修＝森司［アーツカウンシル東京］
編集＝永峰美佳／杉原環樹／畑まりあ［アーツカウンシル東京］
田村悠貴、山口麻里菜［特定非営利活動法人Art's Embrace］
デザイン＝星野哲也
印刷＝三永印刷株式会社
発行＝公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
九段ファーストプレイス8階
TEL＝03-6256-8435／FAX＝03-6256-8829
Email＝info@turn-project.com

©2021 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

TURN公式ウェブサイト＝turn-project.com

文化でつながる。未来とつながる。
Tokyo Tokyo FESTIVAL

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは
オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。
「TURN」は、その一環として展開しています。

東京都　ARTS COUNCIL TOKYO　Arts Embrace　TOKYO GEIDAI